

( 様式D-2 )  
( 別 紙 )

## 令和4年度 海外派遣研究員研究報告書

令和4年10月29日

日本大学理事長 殿  
日本大学学長 殿

所 属 法 学 部 ( 研 究 所 )  
資格・氏名 教授・真道 杉

令和4年度海外派遣研究員 ( 短期A ) の研究実績を、下記のとおり報告いたします。

### 記

- 1 区分 短期 A
- 2 研究課題

オーストリア文学史におけるイルゼ・アイヒンガーに関する研究

- 3 派遣期間 西暦 2022年8月1日 ~ 2022年9月10日
- 4 派遣先 オーストリア・ドイツ
- 5 研究目的

2021年に行われたイルゼ・アイヒンガー生誕100周年記念において、オーストリア外務省委託デジタル・パネル展覧会キュレーションや *Aichinger Wörterbuch* (アイヒンガー辞典) 出版はじめとするいくつかの国際研究チームによる共同研究に参加した。現在それらの研究成果を踏まえ、ウィーン大学のクリスティーネ・イヴァノビッチ氏とイルゼ・アイヒンガー文学作品をオーストリア文学史の文脈の中で位置づける共同研究を進めている。この研究成果はイヴァノビッチ氏と共同編著の論文集 *Konstellation österreichischer Literatur: Ilse Aichinger* (オーストリア文学情勢：イルゼ・アイヒンガーをめぐって) にまとめ、オーストリアの Böhlau 出版から出版する予定である。

今回の在外研究はこの成果物のための研究が主たる目的となる。この研究のための資料収集、現地研究者及び出版社との打ち合わせをオーストリア・ウィーン及びドイツ・マールバッハ、ベルリンで行う。オーストリアウィーンでは、文学の家、国立図書館の資料及び文学アーカイブにおけるイルゼ・アイヒンガー、H.C.アルトマンを中心とした資料収集及び共同研究者との研究打ち合わせ、出版社との打ち合わせが主な研究活動になる。ドイツ・マールバッハのドイツ国立文学アーカイブではアイヒンガーの一次資料 (原稿や書簡など) のリサーチ、そしてベルリンでは、アイヒンガーの長女ミリアム・アイヒ氏との面談及びインタビュー、アイヒンガーの映画を手がけたクリスティーネ・ナーゲル氏とのインタビュー及び、日本におけるアイヒンガー展示発表の打ち合わせを予定している。

## 6 研究概要

- ① 今回のメインテーマである来年刊行予定の論集"Konstellation österreichischer Literatur (イルゼ・アイヒンガーとオーストリア文学) について、共同研究者とのセッション及び打ち合わせ：

Dr. Christine Ivanovic 氏 (共同編著者、ウィーン大学) , Dr. Martin Kubaczek 氏 (作家・文芸評論家) 、 Dr. Beatrice Simonsen 氏 (作家・文芸評論家) 、 Dr. Stefano Apostolo 氏 (ミラノ大学) 、 Dr. Sabine Bergler 氏 (ウィーンユダヤ博物館) 、 Prof. Roberta Ascarelli 氏 (シエナ大学) とそれぞれ打ち合わせをした。

- ② EU 文芸週間 (2022)打ち合わせ

渡航前にオーストリア大使館からの依頼で、今年秋に東京で開催される EU 文芸週間にイルゼ・アイヒンガーについてのパネル・トークをすることが決まったため、Dr. Christine Ivanovic 氏の招聘及びパネル・トークの内容について打ち合わせを行った。パネル・トークは今年秋から日本で公開予定のオーストリア外務省企画、イルゼ・アイヒンガー生誕 100 周年記念パネル展示"Es begann mit Ilse Aichinger" (「戦後文学はイルゼ・アイヒンガーから始まった」 (仮題)) 公開に合わせて行うものである。登壇は 11 月 27 日 (日) の予定。

- ③ イルゼ・アイヒンガー生誕 100 周年記念展示会"Es begann mit Ilse Aichinger" (「戦後文学はイルゼ・アイヒンガーから始まった」) パネル展示のための打ち合わせ

日本語訳の展示用パネル制作者、Manfred Thumberger 氏とデジタル展示デザイン及びパネル制作について打ち合わせを行った。

- ④ 研究に関する資料収集

論文執筆のため、マールバッハのドイツ文学文書館の Handschriftenlesesaal (手稿保管セクション) において、イルゼ・アイヒンガーの手稿研究を行った。今回はパネル展示の発表のための資料研究及び、共編著執筆のための資料収集が主な目的であった。1940 年代の戦中の非公開の手記及び後期の Subtexte 執筆の手稿研究が主なターゲットとなった。後期の手稿については、特にイルゼ・アイヒンガーが執筆した H.C.アルトマン、ヴィクトール・フランクルについての手記を中心に資料収集を行った。

- ⑤ Mirjam Eich 氏とのインタビュー

アイヒンガーの長女 Eich 氏はドイツ国立文学アーカイブに保管されているアイヒンガー資料の管理者である。現在準備中の論集とそこで使用するアーカイブ保管資料について打ち合わせをすることと、その資料その他についてインタビューを行った。

- ⑥ Christine Nagel 氏との打ち合わせ

( 様式D-2 )

アイヒンガーパネル展示公開に合わせて、Nagel 氏監督映画 Wo ich wohne.の日本上映が決まっている。その詳細に関する打ち合わせ。

⑦ 今後の共同研究について打ち合わせ

ウィーン大学専任講師 Dr. Bernhard Seidl (日本学) と批判言語文化について論じ、共同研究の可能性について意見交換をおこなった。

⑧ その他

ウィーン大学語学センター (日本大学法学部提携校)、センター長 Dr. Nikola Kraml 氏との意見交換をした。

⑨ ロンドン渡航中止 (予定変更) について

申請当時予定していたロンドンでの研究活動について、ウィーン到着後、現地の状況を観察及び治安や交通状況についての情報収集をした上で、ドイツ及びイギリスの予定を調整した。コロナの流行状況及び交通手段を鑑みたところ、ヨーロッパ各地からロンドンへの渡航はストライキ等の影響で大幅に乱れているため、数日の渡航はリスクが高いことがわかった。そのため、ロンドン行きは中止とした。

( 様式D-2 )

7 研究結果・成果

今回の在外研究の最も主な目的である、共同編著の論文集 *Konstellation österreichischer Literatur: Ilse Aichinger* (オーストリア文学情勢：イルゼ・アイヒンガーをめぐって) (Böhlau 出版刊行) について：

現地打ち合わせについて：Dr. Christine Ivanovic 氏とは論文集の全体の構成及び、各共同研究者との打ち合わせをするにあたっての、事前準備のセッションを行い、オーストリア文学のもつ特性とアイヒンガー文学のもつ演劇性・政治批判性・郷土文学の観点から、各作家との関連性について議論をした上で、今回直に会ってセッションが可能な研究者と打ち合わせを行った。

Dr. Martin Kuabeczek 氏とは Peter Waterhouse とアイヒンガー文学における関係性及びカフカとアイヒンガーの関係性について論じ、Kubaczek 氏担当箇所について打ち合わせを行った。Beatrice Simonsen 氏と数回にわたり担当章についての打ち合わせを行った。主に Robert Menasse とアイヒンガーのテキストと政治批判について論じた。また、Dr. Stefano Apostolo 氏とは Josef Winkler や Wiener Gruppe 等アイヒンガーと同時代の実験文学を担った作家たちとアイヒンガーの関連性について、議論をした。今回の筆者の担当箇所と同時代作家を扱うことになり、共通点も多いため、大変に有意義な議論となった。Dr. Sabie Bergler 氏とはユダヤ人作家とアイヒンガーの関連性について話し合った。また、Berler 氏からは第2次世界大戦中のユダヤ人亡命の一環であった青年輸送についてウィーンユダヤ博物館で展覧会のキュレーションをした経緯についても情報を得ることができた。

以上がウィーンにおいての主な研究打ち合わせである。

マールバッハにおいてはイタリアのドイツ文学・ユダヤ文学研究家 Roberta Ascarelli 氏と共同研究について打ち合わせを行った。ユダヤ系作家とアイヒンガー文学との関連性、またジェンダーの観点からのアイヒンガー及び同時代作家について議論をした。

出版社との打ち合わせについて：今回論集を出版する Böhlau 出版社はオーストリア有数の文学・文化・芸術分野の書物を手がける出版社である。今回は作家の学術研究シリーズの一冊として論集を出版させていただくことを確認し、現在の進捗状況について報告、またカバーデザインやオープンアクセス権にかかる費用、ピア・レビューについて話し合った。また、オープンアクセス費用については、担当分について支払いをしてきた。

研究資料収集について：

マールバッハ・ドイツ国立アーカイブにおいては、手稿セッション (Handschriftenlesesaal) にて、現地スタッフのサポート (請求した手稿の閲覧サービス及びデータの取り込み作業) を受けながら、アイヒンガーの手稿 (一次資料) の研究をした。特に論集に関わる資料収集について以下報告する。

アイヒンガーの戦争中 (作家デビュー前) の手稿の中には、複数のト書き (会話形式) の手稿が見つかった。作家デビュー後、50年代以降のラジオ劇の台本等においては、アイヒンガーの会話や演劇的な要素が取り上げられることはあるが、この未公開の手稿から、アイヒンガーが初期の散文を発表する前から演劇的要素が強い作品を書いていたことがわかった。初

( 様式D-2 )

期の小説における文体を読み解く上で、この手稿は大きな意味がある。また、後期の映画への傾倒も、映画というメディアだけに限って論じるのではなく、ごく若い頃からのオーストリア演劇とも関連して考察する必要があることがわかった。

H.C.アルトマンとの関連性について、後期の手稿から手がかりを探した。戦後のオーストリア文学を担った二人であるが、その作家生活においては、アイヒンガーとトーマス・ベルンハルトに見られるような緊密な関係はないことがわかった。この点においては、Mirjam Eich氏とのインタビューでも裏付けが取れた。アイヒンガーが書いたH.C.アルトマンについての草稿と両者の発表したテキストにより今後分析を行なってゆく研究の方向が定まった。

ヴィクトール・フランクルとの関係性については、すでに論文を発表しているが、今回の資料研究で、今まで取り上げられていない資料が見つかった。アイヒンガーが保管していたフランクルについて書かれた新聞記事と草稿について、論文にまとめる予定である。

ウィーンでは、主に文学の家にて資料収集を行った。国立図書館も使用したが、今回必要とする資料は主に文学の家に多いことがわかり、文学の家を主に利用した。こちらでは、雑誌記事や新聞記事を中心にアイヒンガー、H.C.アルトマンを中心に文献調査を行った。昨年はアルトマンも生誕100周年だったため、新しい刊行物が多くあり、最新のアルトマン研究を概観することができた。

ベルリンにおけるMirjam Eich氏との会談について：Eich氏はアイヒンガーの遺産相続人であり、マールバッハに保管されている一次資料については、Eich氏がその著作権の管理をしている。一般公開されていないマールバッハの手稿閲覧にもEich氏の許可を得て資料収集をさせていただいた。今回の論集で一次資料を公開する場合は、改めてEich氏の許可が必要となる。今回の会談では、論集の趣旨について改めて説明をし、主旨にご賛同いただき、一次資料を利用する場合の段取りについて打ち合わせをし、原稿全体を確認していただいた上で、公開の許可をいただくこととなった。また、マールバッハに保管されている資料についてもいくつか質問をして、お答えいただいた。

EU文芸フェスティバル及びアイヒンガーパネル展示の日本公開に向けての準備の成果について：

2021年にDr. Chistine Ivanovic氏とともにキュレーションを手がけたイルゼ・アイヒンガー生誕100周年記念パネル展示会"Es begann mit Ilse Aichinger"（「それはイルゼ・アイヒンガーから始まった」）（オーストリア外務省制作）は昨年コロナの影響で日本での展示は見送られた。この夏に日本語訳を仕上げ、オーストリアでパネル制作をすることとなった。パネル制作にあたり、パネル制作担当のManfred Thumberger氏と数回にわたり打ち合わせを行った。パネルは11月に日本へ送られ、11月27日に東京で開催されるEU文芸フェスティバル（会場：インスティテュート・セルバンテス）にて紹介する。当日は学習院大学の小林和貴子氏とともに登壇予定。

パネル展示のプレゼンテーションに合わせて、2014年に制作された映画Wo ich wohne- Ein Film für Ilse Aichinger（「私が住む場所 イルゼ・アヒンガーのための映画」）クリスティー

( 様式D-2 )

ネ・ナーゲル監督) が11月28日にオーストリア文化フォーラムにて上映されることになった。今後パネルが展示される会場での上映を許可していただいた監督 Christine Nagel 氏と映面上映についての詳細を打ち合わせした。その後も、制作会社と日本での上映に向けて準備を進めている。

日本大学法学部との提携校であるウィーン大学と今後の提携交流及び学術交流についての意見交換について：

アイヒンガー研究だけでなく、今後の学際研究の可能性をさぐるため、ウィーン大学日本学研究所講師 Dr. Bernhard Seidel 氏 (社会言語学専門) と日本語とドイツ語の言語運用 (特に風刺を中心に) について議論。ウィーン大学と提携拡大のため、将来短期客員教員として招聘する可能性についても話をした。

また、本学部の提携大学ウィーン大学語学センター Sprachenzentrum の夏期語学講習について現状を視察をし、センター長の Dr. Nicola Kraml 氏と意見交換をした。本年の講座は対面授業が戻って、参加者が大変に多い。日本からは複数の大学がすでに短期語学研修を再開しており、現地の受け入れ体制がうまく機能していることを確かめることができた。センター長から、日本大学の短期語学研修の再開も待ち望んでいるとお言葉をいただいた。

本学部からオーストリア政府給付生として派遣された2名も9月からウィーン大学の語学講習を受講していた。

以 上